カケル
vol.1
山口市

kakeru

ゆめはくカフェ通信

July 2021 **1** Yamaguchi

芸術文化のコミュニティ・派生するサロン

藤 浩志
（美術家・秋田市文化創造館館長）

×

明日香 健輔・渡邉朋也
（阿東文庫）（YCAM）

山口県発達障害児者施設
山口ゆめ回廊博覧会
YAMAGUCHI YUME KAIRO EXPO

ゆめはくカフェとは

山口ゆめ回廊博覧会が開催される山口県央連携都市圏域の
７市町をつなぐリレー形式のトークイベントです。
地域ホストはそれぞれのエリアで活躍するキーパーソン、
ゲストは圏域外で活躍するアーティストやクリエイター。
両者が各地域のとっておきの場所を会場に語り合い、
地域の魅力を掘り起こしていきます。
カフェでくつろぐように、楽しいおしゃべりに耳を傾けてください。

そんなイベントの模様を収録した『ゆめはくカフェ通信 kakeru』。
ゲスト × 地域ホストの“かける”と
７市町に七色の虹を“かける”イメージから名付けました。
トークとともに、その土地の持ち味を存分にお届けします。

山口ゆめ回廊博覧会　2021年７月～12月

山口県央連携都市圏域（山口市、宇部市、萩市、防府市、美祢市、山陽小野田市、島根県津和野町）で開催する、地域の特徴をいかした周遊型博覧会です。愛称は『ゆめはく』。特別な場所で体験するアートと食のコラボレーションや、普段は見ることができない場所を案内するスペシャルなまち歩きなど、「いま・ここ」でしか体験できないゆめはくに参加しよう！

公式Webサイト　https://yumehaku.jp

山口市阿東の田園風景

阿東文庫の外観（廃校になった亀山小学校）

人を吸い寄せるのは、はみ出した場。連携が地域の新しい面白さを生み出す。

ゆめはくカフェ　vol.1

「芸術文化のコミュニティ・派生するサロン」

2021年5月15日　阿東文庫（山口市）

捨てられた本を廃校となった小学校に収蔵し、地域に公開しながら、独自の視点で自由にものづくりを続ける阿東文庫。幅広い芸術文化のプロジェクトを仕掛け、実験の場を模索し続ける文化施設、山口情報芸術センター［YCAM］。両者の関わり合いが生み出す魅力をさまざまな角度から解体・分析していくと、さらなる可能性が発見できました。ものづくりの在り方や理想を和気あいあいと語り合った、オンラインでの5人のトークをお楽しみください。

藤 浩志

（美術家・秋田市文化創造館館長）

×

明日香 健輔

（阿東文庫）

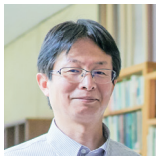
渡邉朋也

（YCAM）

ゲスト

藤 浩志　Fuji Hiroshi

美術家。秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科教授。奄美大島出身の両親の影響で大島紬周辺で遊ぶ。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域をフィールドとした表現活動を志し、全国各地の現場でプロジェクト型の表現を模索。同大学院修了後パプアニューギニア国立芸術学校に勤務し原初的表現と社会学に出会い、バブル崩壊期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。「地域資源・適性技術・協力関係」を活用したデモンストレーション型の美術表現により「対話と地域実験」を実践。
https://www.fujistudio.co



地域ホスト

明日香 健輔　Asuka Kensuke

1964年大阪府生まれ。神戸大学経営学部経営学科II課卒業。2002年（有）FirstClassを設立。2007年山口県阿東町（現・山口市）に移住。移住後は廃校を活用した図書館『阿東文庫』の運営や、地元老舗和菓子屋を継業しリニュアルオープンし、本業、家業、副業、事業の複業を日々こなしている。2014年にYCAMの主催する『RADLOCAL』に参加。また同じくYCAMの展覧会『地域に潜るアジア：参加するオープン・ラボラトリー』を契機に、一般社団法人SpedagiJapanを設立してバンブーバイクの開発と活用に取り組む。

地域ホスト

渡邉朋也　Watanabe Tomoya

1984年東京都生まれ、山口市在住。コンピューターやインターネットといったメディアテクノロジーをベースに、インスタレーション、映像作品、ダジャレ、エッセイなどを制作する。主なグループ展に『transmediale 2014』（2014年／ドイツ・ベルリン）、『のせでんアートライン2019』（2019年／兵庫＋大阪）。主な個展に『信頼と実績』（2017年／京都）。著書に『SEIKO MIKAMI―三上晴子 記憶と記録』（2019年／NTT出版／馬定延との共編著）がある。山口情報芸術センター［YCAM］アーキヴィスト、ドキュメント・コーディネーター。

阿東文庫とYCAM
出合いから広がる可能性

――本日の進行を務めるBEPPU PROJECTの山出です。今回は、美術家で秋田市文化創造館館長の藤 浩志さんをゲストに迎え、地域ホストに阿東文庫の明日香 健輔さん、山口情報芸術センター（以下、YCAM）の渡邉朋也さん、さらに山口ゆめ回廊博覧会のクリエイティブディレクターである服部滋樹さんを加えた5人でお話を進めていきたいと思います。早速ですが明日香さん、阿東文庫の活動の経緯から教えていただけますか？

明日香　山口市の中心地から阿東に移住してきた初代代表の吉見正孝さんが、廃品回収のアルバイトをするなかで、毎日たくさんの本が捨てられていることに気づいたのがきっかけです。最初は、不要になった本を譲り受けて自宅に保管されていました。どんどん増えて次第に手狭になってきたころ、廃校になった亀山小学校に置かせてもらえることになったそうです。それが今から15年前の話。そこから1、2年が過ぎたころから私も活動に参加するようになり、本を一般にも公開し始めました。現在おそらく13万冊近くの本があると思います。2人で作業をしているので、なかなか片付けが追いつきません。廃校に雑然と本が置いてある、この状態そのものが阿東文庫だというふうに私は思っています。

旧亀山小学校を活用した『阿東文庫』の初代代表の吉見正孝さん（右）と現代表を務める明日香 健輔さん（左）。この2人を中心に、私設図書館の運営や地域活性化のさまざまなプロジェクトが展開されている

――どうして、このような活動を始められたのですか？

明日香　特に崇高な目標のようなものがあったわけではなくて、地元から出る本をただただ集めて本棚に収めていく、ということを続けていただけです。そうするうちに、「一緒にこんなことをやりませんか？」「こんなことできませんか？」など、さまざまなご縁をいただいて、いまに至っています。

――服部さんは以前、阿東文庫に取材に行かれたことがあるとお聞きしました。

服部　YCAMが開催した、『地域に潜るアジア：参加するオープン・ラボラトリー』の取材で2014年にお伺いしました。YCAMのスタッフから阿東文庫を紹介していただいたときは、本当に驚きました。少年のような心を持った方々が「本は地域の宝である」と考えて、地域の知性や文化を守るために活動されていることにとても感銘を受けました。それからずっと、阿東文庫の大ファンなんです！

――阿東文庫は本を題材に活動されていますが、YCAMとの関係性によって、活動にさらに広がりを持たせているのかなと思います。続いて渡邉さん、YCAMがどのような施設なのか、紹介していただけますか？

渡邉　山口情報芸術センター、通称YCAMは、高度情報化社会に向けた文化施設として2003年にオープンしました。図書館や映画館、ギャラリー、劇場などが複合した施設で、展覧会をはじめダンスや演劇などのパフォーミング・アーツ、映画の上映、ワークショップなどをおこなっています。施設名に「情報」という言葉が入っているように、メディア・テクノロジーを駆使した作品の発表や制作にも力を入れています。それらと並行しておこなっているのが、メディアリテラシー教育です。コンピューターやスマートフォンなどを使った表現を支援する教育プログラムを提供して、幅広い年齢層の方々に参加していただいています。そうした幅広い活動のなかで、私は展覧会や公演といった活動の記録や保存などをおこなうドキュメンテーションやアーカイブを担当しています。

撮影：山中 慎太郎（Qsyum!）　写真提供：山口情報芸術センター［YCAM］

山口市の中心部、中央公園に隣接する山波型の屋根が印象的な山口情報芸術センター、通称YCAM（ワイカム）。国内外のアーティストたちとコラボしながら、最先端のメディア・テクノロジーを用いた幅広い表現方法を探究している

――YCAMと阿東文庫の関係についても教えていただけますか？

明日香　最初の出合いは、確か2013年だったと思います。それまで工場でしか使えなかった3Dプリンターやレーザーカッターといったものづくりの道具、いわゆるパーソナル・ファブリケーションと呼ばれるものが、個人でも比較的安価に手に入るようになってきたころでした。いろいろなところで「山口のようなローカルにこそ、市民が自由に使えるものづくりのスペースがあったら面白いのではないか」と話していたら、偶然YCAMのスタッフを紹介していただけることになりました。

撮影：丸尾隆一（YCAM）　写真提供：山口情報芸術センター［YCAM］

2014年に阿東文庫で開催された『地域に潜るアジア：参加するオープンラボラトリー』では、3Dプリンターやレーザーカッターなどのデジタル工作機材を積んだ移動式ラボラトリー『MOBIUM』を使って、地域資源を活用したさまざまなワークショップがおこなわれた

渡邉　我々も、YCAMが培ってきた知識や技術、経験と一次産業を掛け合わせることで、何か面白いプロジェクトができないだろうかと模索していました。それまでは、山口市民と一緒に制作したりプロジェクトをおこなったりする場合は、YCAMやその近辺でのみ展開していました。しかし2005年に合併して、山口市の面積が、北は日本海に近いところから、南は瀬戸内海側までに拡大してからは、周辺地域との関係性をより深めていかなければならないという空気感が増していきました。そういったYCAMの潜在的なニーズと明日香さんの目指していたものが、うまくはまったのだと思います。

――阿東文庫とYCAMとの出合いは、明日香さんの個人的な興味がきっかけだったのですね。

渡邉　そうしたご縁がきっかけとなり、2014年に、バスを改造した移動式ミュージアム

『MOBIUM』に、YCAMにあるレーザーカッターや3Dプリンターなどの機材を積み込み、出張ラボトリー『地域に潜るアジア:参加するオープンラボトリー』を阿東文庫で実施しました。このときは、およそ3週間にわたり、地域の人とインドネシアのアーティストが一緒になって、山口の地域資源をいかしたプロジェクトの展開を模索しました。

また2016年には、『世界ヴィレッジデザイン会議』というカンファレンスを企画して、阿東文庫を舞台にフィールドワークやディスカッションを開催しました。

明日香　そのときに出合った、若者を村に戻すことを目的としたソーシャルでサステナブルなデザイン活動に強い共感を覚えました。それで、彼らが開発した竹を素材にした自転車『バンブーバイク』を阿東でも展開したいと、Spedagi Japan（スペダギジャパン）を立ち上げました。山口市阿東とインドネシアのテマングンという田舎同士がコネクトして、とても面白いことができたと思っています。現在は、阿東文庫をデザインスタジオとして、地域の自然資源をいかしたものづくりやイベントなどもおこなっています。

阿東産の竹の集成材をフレームに用いたバンブーバイクは、インドネシアでデザイン・開発された自転車に倣ってつくられたもの。美しい山並みに囲まれた阿東の田園風景をバンブーバイクで巡る里山サイクリングツアーにも活用されている

渡邉　山口県は、京都府、大分県に次いで竹林の面積が全国第3位といわれています。そこで、竹をうまく活用するために、インドネシアの方々から教えていただいたバイブーバイクの技術を発展させて、オリジナルのバンブーバイクを完成させました。明日香さんたちが面白いのは、自転車をつくって販売するのではなくて、ワークショップとして展開しているところ。あくまでも阿東のことを知ってもらうきっかけとして、バンブーバイクが存在しています。

明日香　こうした活動を展開していると、みなさん必ずといっていいほど経済的な効果を求められるのですが、私は始めた当初からバンブーバイクは売らないと断言しています。今後もフラッグシップ的なアイコンであり続けたいと考えています。

既存の枠にとらわれない新しい価値を生む思考

――阿東文庫と同じように、廃校活動や古本を集めているところは、全国にもたくさんあると思います。なぜYCAMのようなメディアアートの最先端にいる方々が、阿東文庫に魅力を感じられたのでしょうか？

渡邉　吉見さんや明日香さんから醸し出されるアナーキズムが、阿東文庫の大きな魅力だと思います。YCAMもよく実験場といわれるのですが、それよりもさらにハードコアな実験ができる場所が、阿東文庫だと感じています。

フランスに、たった1人の男が石を拾い集めて、33年もの長い歳月をかけて完成させた『シュヴァルの理想宮』という奇想天外な建物があります。アウトサイダー・アートとして語られることが多いのですが、私はこれと阿東文庫の活動がとてもよく似ていると感じています。

YUMEHAKU-CAFE　vol.1　Yamaguchi

2006年に廃校となった亀山小学校を利用した私設図書館『阿東文庫』。当時の面影を残す校舎内には、地域の人々から譲り受けたおよそ13万冊の書籍が収蔵されている。廊下に高く積み上げられた段ボールは圧巻のボリューム

阿東文庫の活動そのものが、ある種のパフォーマンスのようにも見えるんですね。だから、明日香さんに「どうしてこんなことをしているの？」と聞くこと自体が野暮だと思っています。

――そろそろ、そうした場や空間、仕組みをつくる天才、藤さんにもお話をお聞きしたいと思います。

藤　僕のモットーは「ギリギリアウトを目指せ」なのですが、これは「規制から飛び出したところでしか新しい価値は生まれない」という考えからきています。ギリギリセーフだと、どこか物足りなく感じてしまうんですよね。先ほどからのお話を聞いていて、はみ出しているけれど成立させている、それが阿東文庫なのだと感じました。

一番難しいのは、つくる場所を確保することではないかと思います。何かを制作する場所には、本来何も縛りがないはずですが、制作するものによっては、音が出る、臭いが出る、煙が出る、ゴミが出る…余計なものがいっぱい出てくる。だから、そういうことが許される場所は実は意外と多くありません。

阿東文庫はなぜかそれが許されている気がする。何か新しいことができるのではないかという気がする。そこが本当に魅力的だと思います。

――藤さんは、活動や場をつくるときに、どのようなことを大切にされていますか？

藤　僕が大切にしているのは、やはり「誰と活動するのか」ということです。2010年に豊島で行った『瀬戸内国際芸術祭2010』では、地域のために一生懸命に活動を模索する架空の人物『藤島八十郎』の家をつくりました。そのときに知り合いの本棚の中から八十郎さんらしい本を集めてきて展示をしましたが、本棚をつくることでキャラクターが生まれてくるんですね。空間をつくるうえで、本がいかに大きい影響を与えるかということに改めて気づかされました。

服部　本を集めるとカテゴライズしたくなります。でも、阿東文庫の本は種類ごとに分けられていません。その人の好みや人格が本から自然と滲みでてしまうという理由から、1人から譲り受けたものはなるべく1つの棚に並べられるようになっています。だから、本棚を見ると、その人の人生を感じ取ることができる。それってめちゃめちゃかっこいいですよね。コンセプトが廃校の中にコンテンツ化されて、それが定着していることにとても魅力を感じます。

何か面白いことが起きる「場」をつくる

――藤さんは日々の生活のなかで増え続けるゴミを捨てずにカテゴライズするという実験を繰り返していらっしゃいます。なぜ、捨てられてしまうものに興味があるのですか？

藤　興味があるというよりも「無視できないもの」という表現の方がしっくりきます。手をかけたいとか、関わりたいとか、触れたいとか、介入したいとか、一緒にいたいとか、無視できないものっていっぱいありますよね。僕にとっては、空き家や廃材といった一般的には無用の長物と呼ばれるものがそれに該当します。

それと同じように無視できないのが、美術大学生や15歳から25歳ぐらいの若者が、まだ何も価値づけられていないものをつくろうとしている姿です。いままでにない価値をつくることが、芸術や研究だと思います。本来、それを教えるのが大学や文化施設のはずなのですが、どうしても過去の文化を見せるところに重点が置かれがちです。もちろん過去はリスペクトすべきもので、自分をつくるための栄養素の1つではあるのですが、僕はやはり実験的なことや、この先どうなるかわからないことに取り組むことの方が、ずっと重要だと思っています。たくさん失敗して試行錯誤するなかで生まれてきたものが、おそらく次の時代をつくるうえでの大きな価値になるのではないでしょうか。何よりもつくろうとする態度そのものが美しい。それをやり続けること、それができる現場こそが大事なのだと思います。

その現場をつくるためには、興味や関心を持ってくれる人たちを集めなくてはいけないし、そういう人たちとの接点をつくらないといけない。私が館長を務める秋田市文化創造館でも、そうした活動を大切にしています。

――それはまさに阿東文庫さんの活動に近いのではないでしょうか。一方で、高齢化が進む地域においては、新しい関係性が生まれづらいという課題があると思います。そこに対して何かヒントをお持ちでしたら教えてください。

藤　いままでとは全く違うチャンネルを持った人、異なる専門分野や考え方を持った人が入ってくることで、世界が大きく広がったり変わったりしていくような気がしています。そのためには、どれだけ多くの人たちを受け入れられるかということが重要です。場やシステム、雰囲気をつくると、そこに新しい人が飛び込んでくる。新しいデモンストレーションをすると、「こんなことができるかもしれない」と思って、その地域に入ってくる人がいる。どういう人が入ってくるのかわからないという不安もあるかもしれませんが、その人を信じて受け入れることが大事です。そこから始まることが非常に大きいと思います。そういった意味では、明日香さんがどうして山口市阿東に引っ越してきたのかに、とても興味があります。

明日香　昔から田舎暮らしに興味があって全国各地を探していたのですが、なかなかピンとくる場所が見つからなくて、計画は一旦白紙に。それからしばらくして、システム会社との仕事の関係で、アメリカに移住する計画が持ちあがったのですが、リーマンショックの影響を受けて取引先が倒産し、これもまた白紙になりました。ちょうどそのころ、用事があって阿東の叔父の家に行くことがあり、これからのことについて話をしていたら、古民家を譲ってもらえるという想定外の展開に！ 探していたときには全然見つからなかったのに、ご縁って不思議だなと思いました。

阿東に移住してからは、「何のためにやっているのですか？」「阿東文庫って何ですか？」と、存在理由をよく問われるようになりました。「本が好きというだけでここまでのことができるのか」と、みなさん不思議に思われるみたいです。だから、先ほど藤さんがおっしゃった「無視できないもの」というお話には、非常に共感します。私の場合は「大きなお節介をしています」という言い方をしているのですが、理解していただくのはなかなか難しいですね。

藤 浩志《ToySaurus》

今回のゲスト、藤 浩志さんが2000年から始めたおもちゃ交換システム『かえっこ』。その中で交換されずに残り続けたおもちゃを使って制作された巨大な恐竜のオブジェ《ToySaurus》は、大量生産・大量消費という現代社会が抱える大きな問題を明らかにする

――なるほど。そういうときにYCAMの存在は大きいですよね。

藤　山口ゆめ回廊博覧会のエリアを見ると、阿東文庫は、萩市や島根県津和野町にもアクセスしやすい位置にあります。それらの結束点という視点で捉えてみると、今後ますますYCAMとのつながりが重要になっていくと思います。

――目からウロコの発想です。考え方によっては、阿東文庫が中心になるともいえます。

藤　数カ月前に職場の同僚が、いろいろな人たちが集まってくる吸引力のあるものや場所、イベントのことを「コンタクト・ゾーン」という言い方をしていたのですが、そこで起こっていることよりも、その周辺で派生していることの方が実は重要なのではないかと感じています。正式な報告書には登場していない人たちが、その周りでとても面白いことをしている。もちろんアーティストのような存在も必要ですが、アーティスト未満のこれから何かをつくろうとしている人たちが、その周辺に集まることで、新たな面白さが生まれるのだと思います。今後は、そうした活動をどれだけつくっていけるかが、さらに重要になるのではないでしょうか。

渡邉　そうですね。プラットホームとして、YCAMも自立的な活動が生まれてくるようなことに貢献できる場所になれたらいいなと思っています。これからは、そうした活動や場をつくる姿勢というか、考えていくプロセスのようなものも、もっとオープンにしていきたいですね。

服部　山口市にYCAMがあることでムーブメントのようなものが起きているように感じています。YCAMがムーブメントを起こしているのか、周辺がムーブメントになっているのかはわからないのですが、いずれにしてもYCAMがコンタクト・ゾーンになっているのだと思います。先ほど藤さんが「ムーブメントを取り巻いている環境がコンタクト・ゾーンになっている」とおっしゃったことには深く共感します。

渡邉　山口市には、もともとムーブメントが起こる土壌があったのだと思います。大内文化に代表されるように古くから文化を大切にする風土があり、そこに1970年代から80年代の美術館建設ラッシュや直近の市民のアート活動などのムーブメントが加わり、その結果YCAMが1つの結接点として生み出されたのだと思います。

藤　これからデジタルアーカイブの重要性がどんどん増してきます。だから、渡邉さんのようなアーキビストが施設に存在することは、とても大切なことだと思います。ポストコロナにおいて、デジタルな情報がどのように蓄積されていくのか。そこで活動がどのようにつくられていくのか。リアルとバーチャルが融合して、いかに新しい文化をつくっていくのか。YCAMも阿東文庫もまさに可能性の塊ではないでしょうか。これからの展開がますます楽しみです。

プロジェクトから
プログラム
さらには
ムーブメントへ

――最後に服部さん、まとめの言葉をいただけませんか？

服部　最近ちょっと整理してみたことがあって。いいプロジェクトというのは、持続可能性が高いものではないでしょうか。人が入れ替わっても続いていけば、プロジェクトがプログラムに成長したということだと思います。プロジェクトがプログラムに成長すれば、それまでの関係とは全く違った人たちも関わることができるようになる。これがどんどん進化していくと、今度はムーブメントになっていく。ムーブメントに成長すると、地球の裏側でも「あれ、やってみたいな」と思う人たちがどんどん増えてくる。実はそれがカルチャーということではないかと思っています。

明日香さんたちの場合は、きっと本を集めることがプロジェクトだったと思います。そこから廃校を活用した阿東文庫が生まれたり、アーティスト・イン・レジデンスに参加する人たちが出てきたり、バンブーバイクをつくる人たちが集まったりして、数年のうちにプロジェクトがプログラムに成長していった。そこにYCAMが加わって、その求心力によってさらにたくさんの人たちが集まり、ムーブメントへと進化していった、という状況ではないでしょうか。おそらくこれからカルチャーになったとき、阿東文庫が持っている価値がさらに顕在化されるのだと思います。

――このトークイベントをきっかけに、今後さまざまな活動が広がって、新しいカルチャーが生まれていくことを期待しています。本日はパネリストのみなさん、ありがとうございました！

コロナ禍のため、オンラインでの開催となった第1回目の『ゆめはくカフェ』。和やかな雰囲気の中、さまざまな分野で活躍する5人が、柔軟でユニークな発想をもとにした熱いトークを繰り広げた

◎阿東文庫
〒759-1511 山口市阿東徳佐上新田亀山　旧亀山小学校
アクセス：JR徳佐駅から車で約10分／JR船平山駅から徒歩で約35分

進行役

山出淳也　Yamaide Junya

1970年生まれ。NPO法人BEPPU PROJECT代表理事、アーティスト。文化庁在外研修員としてパリに滞在（2002～04年）。アーティストとして国際的に活躍した後、2005年にBEPPU PROJECTを立ち上げ現在に至る。混浴温泉世界実行委員会 総合プロデューサー（2009年～）、第33回国民文化祭・おおいた 市町村事業 アドバイザー、文化庁審議会 文化政策部会 委員（第14期～16期）、グッドデザイン賞 審査委員（2019年～）、山口ゆめ回廊博覧会コンダクター（2019年～）・平成20年度 芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞（芸術振興部門）。

聞き手

服部滋樹　Hattori Shigeki

1970年生まれ、大阪府出身。京都芸術大学芸術学部教授、クリエイティブユニットgraf代表、クリエイティブディレクター、デザイナー。建築、インテリア、プロダクトに関わるデザインや、ブランディングディレクションなどを手がける。デザインリサーチからコンセプトを抽出し、地域や社会基盤もその領域として捉え、仕組みの再構成と豊かな関係性を生み出すコミュニケーションをものづくりからデザインする。プロジェクトからプログラムへ、ムーブメントからカルチャーへ育むデザインを目指している。

わたしのオススメ

明日香 健輔
（阿東文庫）

お土産

田原屋外郎

田原屋
山口市大内御堀6-2-17　Tel. 083-922-2368
［営業時間］8:00～18:00　［定休日］元日
https://taharaya-uirou.jimdofree.com/
※『田原屋外郎』は限定品のため前日午前中までの要予約

正直なところ、外郎がこんなにおいしいものだとは思っていなくて。山口の外郎に出合ってビックリしました。とりわけ印象的だったのは、田原屋さんの『田原屋外郎』。ぷるんとした何ともいえない食感と、素材の風味を感じられるやさしい甘さがクセになります。希少なワラビ粉を贅沢に使って、昔ながらの手作りをするからこそ出せる味なんでしょうね。私が好きなのは小豆の食感を残した「小豆（つぶ）」。県外から来られた方には必ずおすすめしています。

グルメ

Nishida Coffee「読」

湯田温泉の路地裏にあるコーヒー豆の自家焙煎店です。味はもちろんのこと、「憩」「陽」などの言葉からイメージしてブレンドするセンスもいいなと思いました。おすすめは、香り高くてすっきりした口当たりの「読」。読書のときには欠かせません。ここだけの話ですが、同じ関西出身のオーナーの西田さんには、出会ったときから勝手に親近感を感じています。

Nishida Coffee
山口市湯田温泉5-7-6　Tel. 080-4487-7054
［営業時間］平日12:00～18:00、土祝9:00～18:00
［定休日］日曜日
https://www.nishida-coffee.com/

スポット

阿東の田園風景

国道9号線沿い、妻が営む和菓子屋『葉葉堂』から見える風景は、日本の原風景そのもの。目の前に田んぼが広がり、どっしりとした十種ヶ峰が見渡せます。どうしてここが、日本の絶景百選に入っていないのか不思議なんですよね。遠くに走るSLを見ていると、まるで絵本の世界にいるよう。田植えが終わって、辺り一面が緑に染まる時期が一番のお気に入りです。

NPOあとう（あとう観光協会）
山口市阿東徳佐中3628　tel. 083-956-2526
［営業時間］9:00～18:00　［定休日］月曜日・年末年始
https://ato-kankou.org/

ゆめはくカフェのご案内

ゆめはくカフェ YUMEHAKU・CAFE

掲載誌 kakeru vol.1

1 山口市

「芸術文化のコミュニティ・派生するサロン」

2021年5月15日（土）　会場：阿東文庫（オンライン配信）

室町時代の大内文化を受け継ぎ、今も芸術・文化が盛んな山口市。市内に数多くある芸術・文化に関連した施設やコミュニティの活動を知り、それぞれの役割や関係性、今後の連携について考える。

藤 浩志（美術家・秋田市文化創造館館長）
×
明日香 健輔（阿東文庫）・渡邉朋也（YCAM）

掲載誌 kakeru vol.2

2 山陽小野田市

「産業と暮らしの嗜み方」

2021年5月23日（日）　会場：きららガラス未来館（オンライン配信）

日本の夕陽百選にも選ばれた焼野海岸や見事な地層や岩場が見られる本山岬公園、九州・四国までも望める竜王山公園など、美しい景観に恵まれた山陽小野田市。この地に移住し活動を続けるガラス造形作家と気鋭の建築家が、地域の産業とそこに暮らす魅力を語らう。

藤原徹平（建築家）
×
池本美和（ガラス造形作家）

掲載誌 kakeru vol.3

3 美祢市

「楽しみを発掘する」

2021年6月12日（土）
会場：秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL（オンライン配信）

広大なカルスト大地や鍾乳洞などを資源とした観光が盛んな美祢市。「誰もが3億年の旅をしたくなる」をコンセプトに、原付バイクの貸し出し、ケイビングツアーといったアクティビティを提供するゲストハウス＆カフェバブTRIP BASE COCONEELを事例に、地域の楽しみ方の発掘・創出について語り合う。

梅原 真（デザイナー）
×
松田寛之（秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL）

掲載誌 kakeru vol.4

4 萩市

「旅と交流」

2021年6月19日（土）　会場：萩ゲストハウス ruco（オンライン配信）

江戸時代の地図がそのまま使える城下町・萩市のゲストハウスrucoで、旅と交流をテーマにトーク。宿泊客にはリピーターも多く、移住してくる人もいるというrucoの事例から、人との交流や旅をすることで生まれるものについて話す。

松浦 弥太郎（エッセイスト・クリエイティブディレクター）
×
塩満直弘（萩ゲストハウス ruco）

掲載誌 kakeru vol.5

5 防府市

「発酵・日々たべること」

2021年6月26日（土）　会場：お茶室 芳松庵（防府天満宮内）

毎日の食卓に欠かせない醤油や味噌などの醸造業が盛んな防府市。家で過ごす時間が増え、日常の何気ないことがかけがえのないことになった今、食にまつわるあれこれをテーマにトークする。

高山なおみ（料理家・文筆家）
×
光浦 健太郎（光浦醸造）

掲載誌 kakeru vol.6

6 津和野町

「医食同源」

2021年7月10日（土）　会場：糧（医食の学び舎 旧畑迫病院内）

会場は、津和野町の国指定名勝旧堀氏庭園の一部として文化財指定された、旧畑迫病院で運営される医食同源をコンセプトとした場。津和野の暮らしや医食同源を体現して見えてきたもの、これから目指すものをテーマに語る。

稲葉俊郎（医師・医学博士）
×
大江健太（糧）

掲載誌 kakeru vol.7

7 宇部市

「伝統から紐づく暮らし」

2021年7月18日（日）　会場：igual coffee（永山本家酒造場2F）

自然と産業がバランスよく混在する宇部市。そこで明治から続く永山本家酒造場が大切にしてきたものや地域との関わりを知るとともに、遺したい伝統や景観、受け継がれていく産業と生活、そこに住む人たちの幸せについて考える。

田中元子（株式会社グランドレベル代表取締役社長・喫茶ランドリーオーナー）
×
永山貴博（永山本家酒造場）

次号予告

kakeru vol.2 は2021年7月22日の発行です。
「産業と暮らしの嗜み方」　藤原徹平（建築家）× 池本美和（ガラス造形作家）

山口ゆめ回廊博覧会　PICK EVENTS

山口市
Yamaguchi

ゆめはくでは地域の特徴をいかしたイベントがもりだくさん！
特別な場所で体験するアートと食の夢のコラボレーションや、
普段は見ることができない場所を案内するスペシャルなまち歩きなど、
ゆめはくで「いま・ここ」でしか体験できないイベントをお楽しみください。

山口情報芸術センター［YCAM］特別企画展

坂本龍一　ART-ENVIRONMENT-LIFE 2021
～いま、改めて見つめ直す〈アート〉〈環境〉〈ライフ〉～

10月8日（金）―2022年1月30日（日）

A＿YCAMサテライトA　B＿常栄寺雪舟庭　C＿山口情報芸術センター［YCAM］

A＿坂本龍一＋高谷史郎《water state 1》

A＿坂本龍一＋高谷史郎《water state 1》
作品中央に置かれた漆黒の水面に水滴が落ち、波紋が広がり、
それと呼応するように繊細なサウンドが会場を包み込むインスタレーション作品。

B＿坂本龍一＋YCAM InterLab《Forest Symphony》
樹々の生命活動から生じる電気的な変化を観測、記録し、
そのデータを元に制作されたサウンドインスタレーション作品。

C＿坂本龍一＋高谷史郎《LIFE—fluid, invisible, inaudible...》
坂本龍一氏のオペラ作品『LIFE』の音楽と映像、時間軸を
解体／再構成するかたちで制作したインスタレーションの大作。

この夏はC・S赤れんががゲームセンターに大変身！?

カラクリ博士の異常なゲーセン　YAMAGUCHI PLAYLAND

8月11日（水）―29日（日）　クリエイティブ・スペース赤れんが

山口市在住のカラクリ博士こと、オートマタ作家の原田和明氏による作品展。
オートマタ作品の展示に加えて、カラクリ博士が異常に愛する山口市の文化、歴史、名物をモチーフにした新作ゲームが登場！

竹製のバンブーバイクで走る　阿東・里山サイクリングツアー

2021年7月―11月　第1・第3土曜日　阿東徳佐地域

十種ヶ峰をはじめとする美しい山々を背景に、竹製バンブーバイクで巡る里山サイクリングツアー。
広がる田園や旧石州街道の古い街並みなど、日本の原風景が感じられる。
地元の新鮮野菜が詰まったヘルシーな『あとう路弁当』も提供。

その他のイベントはこちら

公式Webサイト
https://yumehaku.jp

［新型コロナウイルス感染予防対策実施について］各種イベントは新型コロナウイルス感染症への対策を十分に施したうえで実施します。
また、状況に応じて随時イベントの開催可否・内容変更を検討し、変更した内容は公式Webサイトでご案内いたします。

YUMEHAKU-CAFE vol.1 Yamaguchi

kakeru
ゆめはくカフェ通信

カケル　vol.1　Yamaguchi　2021年7月1日発行

発行元: 山口ゆめ回廊博覧会実行委員会事務局（山口市交流創造部山口ゆめ回廊博覧会推進室内）
〒753-8650 山口市亀山町2-1 Tel. 083-934-4152
企画: 特定非営利活動法人BEPPU PROJECT　制作: 株式会社野村デザイン制作室
編集: 廣石正樹（be:spoke）　アートディレクション＆デザイン: 野村勝久　ライター: 小野理枝
撮影: 江本 悟（SARUTO Inc.）　コピーライター: 大賀郁子　デザイン: 岡田一星
イラストレーション: 山内庸資　印刷: 大村印刷株式会社